説教20220424　ミカ4：1-5　ルカ24：36-48「戦いではなく食事を」

植物の命にも心と体があるとすれば、植物の体で最も見栄えのする部分は花でありましょう。プランターの花々もその盛りを過ぎてしまいましたが、そのように花々はやがて散り、その場所に実を結ぶことになります。このように植物の体も、人間の体と同じように時間の流れと共に変化をしていくのです。

では、植物の心という事になりますと、これも人間の心と同じように内側にあって、人間の目には見えないことですから、私たちは植物の立場になってその心を想像してみるしかありません。春の光をいっぱいに浴びて喜んでいたプランターの花は、先日来の長雨に打たれて、「いよいよ散る時が来た、この水を吸収して実をつける時が来た、うれしいことだなあ」と感じているかもしれません。それと同時に、花びらの麗しさがやや衰えたのをみて、かなしさを感じてもいるかもしれません。

さて、今日、ルカ福音書で、イエス様は、人々に御自身の手と足、即ち体を、「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。」と言って、これ見よがしに示して、それを触らせたのです。

一言でいえば、人々はこの時「からだのよみがえり」が信じられなかったのでした。今日の箇所を読みますと、人々はイエス様がよみがえってこられたことは分かったけれども、それが体を伴わない亡霊か何かのように思ってしまったのです。こういう風に思うことはかなり的外れで、罪なことであります。ですから、イエス様は人々にかなり強い口調で「なぜ、うろたえているのか。どうして心に疑いを起こすのか。」と言われて、人々を戒められたかも知れません。

わたしたちも使徒信条で告白しているように「体のよみがえり」を信じることが大切であります。わたしたちは、見える部分であるからだと、見えない部分である心から成っているともいえます。ですから、見えない部分である心だけが復活し、見える部分であるからだが復活しないならば、実に不十分なのです。でも体と言うのは見える部分であるだけに、それがどのように復活するのかを、今に生きる私たちが、天に行って確認することが出来ませんから、ややもすると、体のよみがえりのほうは信じられないという事になってしまいます。人間の体も、植物の様に花びらから果実へと変容するのかも知れません。ともかく、私たちはイエス様に引き寄せられて、朽ちない体へと変えられるのであります。

身体に注目をすれば、現代社会で今おこっていることも見えやすくなります。イエス様も体を伴ってこの地に降ってこられましたから、イエス様もこの地上で、人間と同じように体と心とで、色々な出来事を体験されたのです。そういう意味でイエス様はまことの神であると同時に、まことの人間の一人になられたのです。では、まことの人間の一人であるイエス様と共に、見て参りましょう。

戦争と言うのは、一言でいえば、人々が体を滅ぼし合おうとして戦っている、ということでありましょう。戦争、戦い、争い、これらのことは程度の差こそあれ、どれも、人々がお互いの体を滅ぼそうとして向かい合っている、辛い状況であります。しかし、戦争が遠くの場所で起っている場合は、その悲しいニュースを何度も聞かされても、やがて聞かされただけでは、悲しみを感じることが薄くなってしまいます。それは本来、戦いという事が、体が触れ合うくらいの身近で起こった時にこそ、私たちがそれに切実に巻き込まれ、どうにかしなければならず、そして平和を切実に願い求める者へと変えられるという事でしょう。

ところで私たちの身近に、戦いが無いのかと言えば、全くそうではなくて、今の日本でも、多くの戦いが行われています。それは今の日本で、自殺される方が多く居られるということにも表れています。

身体を滅ぼす戦い、とは逆の道が、食事をすることです。食事をすることは、体に実りを摂取して、体を養い育て、保つことであります。先週の説教箇所も今日の説教箇所も、食事をすること、食べることの記事に溢れています。しかもそれはイエス様と食事を共にする祝福の場面であります。

実は戦う事と食事をすることとは関係がない訳ではありません。今日の招きの言葉でも語られましたように、利己心を以って食べ物を独り占めしようとすれば、そこに早、争いの火種がまかれてしまうことでしょう。ですから、私たちは、食事をするときも、分かち合いの心に満ちたイエス様をその食卓にお招きして、食事を共にすることが大事であります。

又、社会が戦争のほうへと傾いていく時、今日のミカ書の預言を私たちは切実な御言葉として聞き入れ、スキやカマで言い表されているような平和の道具を執り、平和を作る行いをしていくよう、主なる神から言われているのです。

先週の新約の聖書箇所はヨハネ２１章1-14節でした。新約聖書211ページになります。竹井先生が言われていたように聖書と言うのは奥深くて、何度読んでも新たな気づきが与えられるのですが、私も先週の午後礼拝で同じ聖書箇所で説教を致しました。それで、竹井先生の説教と後で、比較してみたのですが、まあ私が食いしん坊であることが反映したのかも知れませんが、竹井先生は「伝道」という事を中心に、そして私は「食事」という事を中心に説教を致しました。どちらの説教も別府不老町教会ホームページから聞けますので、それぞれの御言葉を味わって頂ければと思います。

先週は、イエス様はペトロや愛弟子といった数人の弟子たちに対して、まず「子たちよ、何か食べ物はあるか」と声を掛けられます。この様に、復活されたイエス様もお腹を空かせて、「何か食べ物はあるか」と子どもの様に、食べ物を求められたところに安らぎを感じます。ここで復活されたイエス様は弟子たちに何か、厳しいことですとか難しいことを語られたのではなく、ただ「食べ物はあるか」と言われたのです。その言葉を聞いた、愛弟子とペトロは、やがてそれがイエス様であることに気付きます。愛弟子は「主だ！」と一言、喜びの声を上げ、それを聞いたペトロも気付いて一目散にイエス様のほうに走り寄ったのでありました。この二人は、イエス様が死んでイエス様の姿が見えなくなってから、片時も忘れることなく、イエス様の姿を慕って追い求めていたのでありましょう。そのような二人だからこそ、イエス様は、彼らのふるさとの湖にやってこられて、又、彼らと出会って下さったのでした。彼らが元のである漁師に戻っていた、という事は問題ではありません。そして、今はそのような仕事に従事している彼らを、そのままに、いまこの時、イエス様は祝福して下さったのです。

魚はいっぱい取れました。そして、イエス様と弟子たちは、その魚で食卓を囲み、昔と同じように祝福の時を、イエス様と共に過ごしたのでした。

こんな風に、語ってきますと、イエス様の祝福と言うのは実に、身近にあって、決して難しいことではないのです。但し、この愛弟子やペトロの様に、イエス様を常に慕って、イエス様を追い求めているという事が何事にも代えがたく必要なことであります。

では。今日のルカの聖書箇所を見て参りましょう。この場面も、イエス様が焼いた魚を食べられた、という事が先週の、ヨハネの聖書箇所を連想させますが、先週と大きく違うのが、登場人物の構成であります。先週は、数人の弟子たちだけが出て来ましたが、今日の処は、もっと大人数です。２４章33節に次のように記されています。「エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。」１１人とその仲間が集まった、という事は、一人がそれぞれ2，3人の仲間を呼んでくれば、40～50人の人がそこに集まったことになります。その中には、そんなにイエス様を信じていない人たちも含まれていたでしょうから、いわば群衆のような人々の集まりになったといえましょう。その群衆たちの中で、最も声が大きくて大勢を占めた態度と言うのが、イエス様を前にして、恐れおののき、亡霊を見ていると思い、うろたえ、心に疑いを起こすといった態度であったのでした。

わたしたちには集団心理が働きますから、私たちも周りがみんなこんな風に恐れおののいていると、それにつられて恐ろしくなるといったことがよくあると思います。この場面でも群衆にはそのような集団心理が働いたかもしれません。

ともかくイエス様は、そのような人々を支配した罪な思いや態度を鎮めるのに、心を尽くされたのです。「わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。」と言って、手と足を人々のほうに近づけてお見せになるのです。しかしそれを見た人々の喜びがまだ、本物ではなく、ぬか喜びであることを見るや否や、次は「ここに何か食べものがあるか」と言われて、人々を、魚と言う体を、食べる喜びへと導かれたのであります。ここでイエス様が、心を尽くされたのは、人々が戦いへ向かうのではなく、体を摂取して体を養い育て保つ方向へ向かうようにされたという事でしょう。食べ物をとるという事は、日々の祝福の具体的な現れです。ですから、復活されたイエス様は、体のよみがえりを伴って人々に現れて、復活の後も、そのような日常の食事に預かることの祝福が続いていくことを、体で示されたのです。

さて、今迄、この世での体と復活後の体の、いわば連続性について語ってきましたが、この世でのこの体と、復活後の朽ちない体の間には、当然、非連続性もあります。それは冒頭に申しましたように、花が、果実に変化するような様態の変化に譬えられるかもしれません。聖書においては、それは出エジプト記の荒れ野の４０年で人々に与えられた、まことの食べ物であるマナによって知られるでしょう。

マナと言うのは、主なる神から頂くまことの食べ物である御言葉すなわちイエス様ご自身のことを言い表しています。御言葉と言うのは、実に食べ物であります。私たちは、御言葉を毎日どころか、絶えず聞いていないと、よからぬ方向へ道を反れてしまいます。御言葉は、私たちの心と体を守って下さり、祝福して下さり、喜びで満たしてくださいます。では御言葉とこの世の食べ物の違いとは何でしょうか。それは、御言葉はいくらとっても、取り過ぎるという事はなく、御言葉はわたしたちを決して戦いへとは導かないという事でしょう。

そのように全く清い食べ物を、語り伝えるという伝道の業には、確かに、涙して種を蒔くような嘆き悲しみを伴うこともありますが、それと同時に、伝道と言うのはイエス様から常に食卓に招かれている喜びを味わう事でもあります。今日の聖書箇所の２４章4８節「あなた方はこれらのことの証人となる」と記されています。私たちは体と心でもって、イエス様の伝道の業に献身をしていきたいと願います。

祈ります

父なる神よ

あなたの御子は、体をもってよみがえられ、私たちに臨んでいて下さいます。どうかそのまことの食べ物である御言葉を私たちが常に摂取し、この世で御言葉に飢えることが無いようにしてください。

まことの食べ物である御言葉を語り伝えることは、なかなか報いが得られない、涙と共に種を蒔くような道でありますが、そのひと時ひと時に、あなたが慰めと癒し、そして喜びの時を、いつも備えていて下さいますことに感謝いたします。

どうか、私たちが憐れみと慈しみの主である御子に、よりすがりつつ、その道を歩んで行くことが出来ますように。死の影の谷を行くような時も、常に私たちを慰め癒し、喜びを与えて下さるあなたを賛美します。

この花々を初めあなたがお造りになった全ての被造物は、あなたから体を与えられ、やがてその体をつくり変えられ、朽ちない体へと導かれます。どうか私達一人一人が、この世にあってその証し人として、歩んで行くことが出来ますように。